



Title	小林昭博著 『同性愛と新約聖書』
Author(s)	山吉, 裕子
Citation	基督教學, 56-57, 41-45
Issue Date	2022-11-28
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/92838">http://hdl.handle.net/2115/92838</a>
Type	article
File Information	04yamayoshi.pdf



[Instructions for use](#)

三回ほど出てくる。当該論文をバルトは磔刑図でカバーを飾って出版したかったけれど、できなかったということを読んだことがある。本書はそれを実現し、バルト神学を洗礼者ヨハネの「指」のごとく十字架のイエス・キリストを指し示す神学として明らかにした。優れた研究書の出版をとともに喜びたい。

書評

小林昭博著

## 『同性愛と新約聖書』（風塵社、

二〇二一年）

山吉 裕子

本書は、クイア理論を用いた聖書解釈についての著作を精力的に発表している著者が、二〇〇七年に関西学院大学大学院神学研究科に提出した博士論文「同性愛と新約聖書―セックス・ジェンダー・権力構造」を大幅に増補改訂し、刊行したものである。全体は十章から成り、序にあたる第一章とまとめの第十章を除くと、「性」に関する議論の前提となる概念や研究史について論じる前半部（第二章―第四章）と、「同性愛」に関係すると言われている聖書（主として新約聖書）のテクストを積義的・解釈学的に検討する後半部（第五章―第九章）に大別される。

第一章では「府中青年の家」での同性愛者差別事件、日本基督教団における同性愛者差別事件を取りあげ、「聖書に書いてある」という言説が同性愛者差別に用いられてきたことを厳しく批判すると共に、後に続く論考が、聖書とキリスト教に関わる者である著者からの応答であることが示される。

第二章では、フーコーを皮切りに、セクシュアリティが近代以降の概念であり、歴史や文化によって変遷するものであると認識されるに至るまでの研究史をまとめている。第三章では前章を受けて、聖書における同性間の恋愛や性交に関するテクストについて議論する際に、古代世界には存在していなかったセクシュアリティという概念を持ち込むことはアナクロニズムであり、「同性愛」という用語と概念を用いるのは不適切であることが、研究史を踏まえつつ論じられる。したがって本書では近代以前の同性間の恋愛関係を表す際には「同性間恋愛」、同性間の性行為を表す際には「同性間性交」という用語が用いられる。第四章では古代ギリシア・ローマ世界の「同性間恋愛」ないし「同性間性交」に関する諸研究が

明らかにした内容が提示される。すなわち、古代ギリシア・ローマ社会の根底にあったのは「自由人と奴隷」および「男性と女性」の間のジェンダーの支配構造であったこと、そしてそれが性交においては、自由人である男性市民は「挿し手」となることで「能動」「支配」という役割を、自由人女性、少年、外国人、奴隷、売春者は「受け手」となることで「受動」「従属」「屈服」という役割を担うべきだという価値観となつてあらわれていることである。そして社会的な非難は、この役割を逸脱することに対して浴びせられたのであつた。

以上を前提に、第五章では創一三一―18、一八16―33、一九1―29、およびユダ7が、旧約聖書と古代ユダヤ教諸文書におけるソドム伝承を含めて検討され、「ソドムの罪」とは特定の事件や悪徳を言い表しているわけではなく、カナンの豊饒多神の都市文明に象徴される異教世界のヤハウエに対する「背信」や「不信仰」を指しており、そこにはユダヤ教の「異邦人嫌悪」が横たわっているのだと結論付けられる。

第六章―第八章では、新約聖書において同性間性交に

言及するテキストであるロマ 26—27、Iコリ69、Iテモ 10 について、ここで言及されている「ポルノス（男娼）」（第六章）、「マラコス（女のような男／女々しい男）」（第七章）、「アルセノコイテース（男性と一緒に女の寝床を寝る男）」「アンドラポデイス（奴隷商人）」（第八章）を、ギリシア・ローマ世界の性文化の中に社会的に位置づけようと試みられる。いずれの語においてもこれらの箇所背後にあるのは、「パトリアーキー家父長制」と「ミンジニ女性嫌悪」に基づいた「男らしさ／女らしさ」というジェンダー規範と、そこから導き出される、性交において男性が果たすべき「挿し手／能動／支配」、女性が果たすべき「受け手／受動／従属」という役割を逸脱することへの非難であり、さらにユダヤ教から引き継がれた「クセノフオキヒア異邦人嫌悪」であるという。続く第九章では、ロマ 1—26—27 における「クレーシス」は「使用／用法」と翻訳すべきであり、そこで問題とされているのもセクシュアリティではなく、性交の際に「男性」と「女性」が果たすべき「ジェンダーの役割」を逸脱することであると論じられる。

本書では、古代より教会内外で問題の「論拠」とされてきた聖書箇所の釈義に際して、アルカイック期と古典期のギリシア語文献、旧約聖書（主として七十人訳聖書）、古代ユダヤ教文献、新約聖書の用例が丹念に収集、精査されている。それらは本書における議論の展開と、そこから導き出される結論に大きな説得力を与えており、用例集の部分のみを取りあげてみても、その学術的価値は非常に高い。細かな点で敢えて疑問を呈するならば、著者はアクロコリントス山頂にあるアフロディテ神殿に千人以上の「ヘラ神殿娼婦」がいたというストラボンの証言（『地理誌』8・6・20）を、パウロ時代のコリントの状況を反映しているものと見なし（二三七頁）、アフロディテ神殿での売春をコリントのセックス産業を象徴するものとしている（たとえば二二四、二二七、二二九頁）。しかしこの直前にストラボンが話題にしているデマラトスは前七世紀の人物である。さらに直後の8・6・21では「ローマの手で復興された後」、すなわち前四四年以降のコリントについて述べられているが、ここではアフロディテ神殿は「小さな神殿」とされており、神殿娼婦に関する

言及はない。さらにコリントは前一四六年にローマによって完全に破壊されているため、著者がコリントの性風俗に関する証拠として挙げているピンドロスやプラトンの証言を、そのままパウロ時代に当てはめることはできない。また、確かに申一三18(七十人訳)の「ポルノス」は神殿男娼であると解釈されてきたが、それはあくまでも古代オリエント世界における慣習であり、古代ギリシアにおける神殿売春の存在は疑問視されている(古いものでは J. M.-O'Connor, *St. Paul's Corinth*, Collegeville, 1983, 特に55-57。また Baugh, S.M., *Cult Prostitution in New Testament Ephesus: A Reappraisal*, *JETS* 42/3, 1999, 443-460)。パウロが I コリにおいて(不当にも)断罪している「ポルノス」が神殿男娼であった、またアフロディテ神殿の神殿売春がコリントにおける売春構造<sup>ポルノス</sup>を代表していたと結論付けるためには、古代ギリシア・ローマ世界の売春、とりわけ神殿売春について、より詳細な資料の検討が必要である。

また、第九章において著者は特に議論することなく I コリ一四3b-36をパウロに帰しているが、この箇所は

後代の挿入ではないかと疑われている(たとえば青野太潮訳『パウロ書簡』岩波書店、一九九六年、補注 用語解説「女性たちへの沈黙命令」六一七頁、Wolfe, C., *Der erste Brief des Paulus an die Korinther*, THKNT 7, Leipzig, 1996, 341ff. に論点がまとめられている)。そのため、どのような根拠でパウロの手によるものと判断したのかを示す必要があるだろう。

著者が本書を通じて果たそうとしているのは、「聖書に書いてある」という言説のはらむ問題性、すなわち「本当に」聖書に書いてあるのか、そして実際に聖書に差別的な記述がある場合、我々はそれとどのように向き合うべきか、という問題への応答責任である。著者は同性間性交に関する聖書テキストについて徹底的な用例調査を行うことによって、恣意的な解釈を退けると同時に、聖書の記述が当時の価値観を反映した差別や偏見を含んでいることを鋭く批判し、現代の我々には到底受け入れがたいものであると明確に断言する。このようなテキストとの誠実な対話は、聖書を差別と抑圧の道具にしてしまわないために、我々一人一人に求められているものであ

る。本書は「同性愛」問題に関心を持つ者は言うまでもなく、聖書に関わりのある者すべてが読むべき書であると言えるのではないだろうか。

書 評

小林敬著

## 『人間の絆を求めて』

―ガブリエル・マルセルと私―

(共同文化社、二〇二二年)

木村 晶子

本書は長年ガブリエル・マルセルを研究してきた小林氏の集大成とも言える著作である。

マルセルの「我と汝」の関係を軸に、人間の真の「絆」についての考察を試みている。まず本書の構成を見てみよう。

本書はA巻・B巻・C巻の三部構成となっている。A巻は「研究の巻」であり、ここではマルセルの「信仰と誠実」についての考察である。B巻は「教育の巻」とされており、本務校を含む3大学における講義録である。C巻は「省察の巻」となっており、「人間の絆を求めて」